

白居易

字乐天

号香山居士

世称白香山

祖籍山西

生于河南

卒于洛阳

享年七十五

官至太子少傅

谥号文忠

著有白集

文集七十五卷

今存白集

白集七十五卷

今存白集

白居易 上

高木正一 注

中國詩人選集12

昭和三十三年二月二十日 第一刷発行 ©

白居易 上

昭和三十七年六月三十日 第二刷発行

定価 二二〇円

注 者 高^{たか} 木^ぎ 正^{まさ} 一^{かず}

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地

印刷者 山 田 一 雄

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二ノ三 株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説……………五

新樂府

序……………一七

七徳の舞……………一九

法曲……………二四

二王の後……………二七

海 漫漫たり……………三〇

立部の伎……………三三

華原の磬……………三六

上陽の白髮人……………四二

胡旋の女……………四七

新豊の臂を折りし翁……………五二

太行の路……………五五

司天台……………六三

蝗を捕う……………六六

昆明の春……………六九

塩州に城く……………七四

道州の民……………七九

馴らされし犀……………八二

五絃を弾ず……………八七

蛮子朝す……………九二

驃国の楽……………九六

縛られたる戎人……………一〇三

驪宮高し	一〇九	李夫人	一五五
百鍊の鏡	一一三	陵園の妾	一七一
青石	一二五	塩商の婦	一七五
両つの朱き閣	一九	杏を梁と為す	一七九
西涼の伎	二三	井底 銀瓶を引く	一八三
八駿の図	二七	官牛	一八
澗底の松	二三	紫毫の筆	一九〇
牡丹の芳	二四	隋堤の柳	一九四
紅線の毯	二四	草 茫茫たり	一九九
杜陵の叟	二四	古き塚の狐	二〇二
繚綾	二四	黒潭の竜	二〇五
炭を売る翁	二五	天も度る可し	二〇八
母子に別る	二五	秦吉了	二二一
陰山の道	二六	鷗九の剣	二二四
時世の粧	二六	采詩の官	二二七

跋		小川環樹	二三
略図			

解 説

一

この書物の上冊は、白居易はくきよいの数多い作品の中から、早年の力作であり、詩人みずから誇りとし、最も高く評価した「新樂府」しんがふ五十首の全部をえらび、それに訳註を加えたものである。

これらの作品は、李白りはくや杜甫とほの詩のごとく、一読その熱情が胸にせまるものではないが、読めば読むほどに、平明な作風の中に、ゆるみのない味わいがくみとれよう。

また、その内容をなすものの多くは、現代に生きるわれわれの問題とも深いつながりをもつ。

権力者である為政者はもちろん、一人でも多くの人人が、諷刺の言を求めて、これらの歌詩に耳を傾けてくれるようにと、詩人はねがったが、それはまた、著者のねがいでもある。

二

白居易はくきよい、字でよべば白樂天あざなは、中国文学史上でいう中唐ちゆうとう、すなわち八世紀後半から九世紀のはじめにかけての時代の代表的詩人であり、中国はもちろん、わが国でも古来もっとも親しまれてきた詩人である。

生まれたのは、唐の代宗皇帝だいそうの大暦七年たいれき（七七二年）一月で、その年は、唐詩の黄金時代をきずきあげ

た盛唐の二大詩人である李白が死んでから十年目、杜甫のなくなった翌翌年にあたる。

詩人の祖父、白鏐は、河南鞏県の知事、父の白季庚は襄州の別駕、すなわち今の湖北省襄陽の長官輔佐官で終わったというから、その家は代代官吏であつたが、せいぜい地方官を出す程度の低い階層の家であつて、世にきこえた名門の家柄では決してなかつた。しかも、詩人の生まれた頃は、「憐むべし少壮かりし日は、適たま貧賤の時に在り」(文集卷二、悲哉行)と述懐するごとく、家庭の暮しむきは楽でなかつたらしい。

こういう低い階層の、しかも貧しい家庭に生まれた詩人が、年若くして国家試験に及第すると、陝西省盤屋県の尉という地方事務官をふりだしに、皇帝の秘書である翰林学士、また皇帝の諫官である左拾遺をはじめ、忠州、杭州、蘇州等の地方長官を歴任のち、東宮傅育次長の太子少傅となり、さいごは刑部尚書、つまり法務大臣の肩書をもつて、七十五歳のみちたりた生涯を終えた。

文人としては、珍らしく出世街道を歩んだ人と言えよう。それというのも、詩人の豊かな天才と、青年時代のたゆまざる刻苦勉勵の結果によること言うまでもないが、一つには、「世の中が安祿山の叛乱を契機として、変革を経験し、彼のように低い階層から出た人物が、才能をのばして、高い地位につきうべき体制が、ひらけていたからでもある」(吉川幸次郎「新唐詩選続篇」岩波新書)。

しかし、また一方には、かかる体制をこころよからず思う大地主階層の旧官僚たちがあり、詩人のような進士出身の新官僚と、ことあるたびに対立した。また、宮廷にあっては、大奥の茶坊主である宦官が、皇帝推戴の功によって大きな権力をにぎり、地方軍閥化した藩鎮や旧官僚の中には、彼等と結託して、おのが地位を高め且つ強めようと腐心するあまり、つねにみにくい闘争をくりひろげるものもいた。なお、

これら上層の支配階級は、日日の生活にも奢侈淫逸をきわめ、安祿山の乱後、貧困におとし入れられた人民たちから搾取をほしいままにして、少しもはじるところがないというありさまであった。

性、剛直であり、かねがね天下を匡し済めたいとの抱負をもっていた詩人にとって、上層支配階級のかかる横暴墮落は、にくみてもあまりあることであり、そのため、詩人は彼等の悪意にみちた攻撃をうけながらも、それに屈することなく、自己に鞭うっておのが職責をはたすとともに、政治の欠陥をただし、人民の生活を少しでも幸福にすべく、時の皇帝憲宗に、いろいろと建議もし、直諫もした。

三

一方、詩人はまた、かずかずの詩歌をつくって、当時の政治の乱脈や社会の混迷を指摘し、人民の窮状をうったえた。それは、人民の苦しみを無視した権力者たちの横暴墮落にたいする憤りの表白であったとも見られようが、たんなる衝動にかられてのいとなみではなく、はっきりとした主張にもとづく行為であった。

その主張とは一たい何か。詩人が親友元稹げんじんに与えた書簡（文集卷二十八）の中のことばをかりていえば、詩はたんに「風雪に嘲れ、花草を弄ぶ」だけの、きれいごとの言葉であってはならぬ。それが人間の文学としての存在意義をもつためには、詩経の詩のごとく、風、雅、頌、比、賦、興のいわゆる六義に立ち、「上は以て時の政を補け察り、下は以て人の情を洩わし導く」、いいかえれば、「人の病みを救い済め、時の闕を裨け補う」ことを一つの使命とするものでなくてはならぬ、という主張であるが、それは詩人の早年時代、ことに皇帝の諫官としてその非を直諫すべき地位にあった四十歳前後において強烈であった。

かかる主張の實踐として、詩人は、当時の政治を批判し、社会を批評した詩一百七十二首をよみのこした。が、この一類の詩を「諷諭詩」とよんで、おのが文学の大きな誇りとするとともに、最も高く評価した。中でも「新樂府」五十首は、その方面での典型的な作品であり、内容となるものは、「武德より元和に訖るまで、事に因って題を立て、題して新樂府と為す」と、上述、元稹に与えた書簡にのべるごとく、古くは唐の初代の天子高祖皇帝の武德年間から、近くは憲宗皇帝の元和年間にいたるまでの、いろいろな出来ごとを素材として、それに諷刺批評を加えたものである。その中には、淫靡な外国音楽の流行をそしつたもの、けげばけしい流行化粧をなげいたもの、あるいは、婦女を虐待する男性を非難したもの、支配階級の厚葬や逸樂を批判したものなど、さまざまな作品を含むが、とくに目立つのは、政治の乱脈と社会の混乱とを諷刺批評したもの、ならびに人民の苦しみに同情した作品の多いことである。

さて、これらの作品は、五言詩、七言詩といった、普通の形式によらず、「篇に定句無く、句に定字無き」(新樂府序) 樂府の形式でうたわれている。樂府とは、もと漢の時代に音楽をつかさどるところとして設けられた官庁の名であるが、この官庁が作り、または採取した歌謡のたぐいで、樂器の伴奏で演奏された歌そのものをも、のちには官庁の名にちなんで樂府とよぶようになったし、これにならって作られた後世の模倣作をも、同じく樂府という名でよんでいる。

ところで、そうした樂府も後世のものになると、「郊廟の登歌は君の美を賛め、樂府の豔詞は君の意を悦ばしむるのみ。若し興論規刺の言を求めば、万句千章に一字無し」(二一七ページ、采詩官) と詩人がなげくように、いたずらに皇帝をほめたたえたり、その心をよろこばすことをあてこんだ色っぽい歌詞ばかりが多く、それに興論規刺の言、すなわち諷刺批評のことばを求めようとしても、片言隻句すらも見つから

ない。その結果、「君の耳は唯だ堂上の言を聞き、君の眼は門前の事を見ず、貪吏は民を害いて忌む所無く、奸臣は君を蔽いて畏るる所無し」(全)という、なげかわしい世の中になってしまった。

それは、「風俗を觀て薄厚を知り」(漢書、芸文志)、「上は以て下を風化し、下は以て上を風刺する」(詩經序)という、樂府本来の主旨を忘れたがためであつて、樂府を作るものは、よろしくこの本旨にたちかえらねばならぬ、という反省がすでに一時代前の詩人杜甫にもあつて、「兵車行」や「麗人行」のごとき作品をものしたが、意識的にその改革の潮流をつくりだそうと企図したのは、中唐、すなわち白居易の時代になつてからである。詩人の親友である李紳字は公垂が、新題樂府二十首を作つたのが、そのきっかけとなつた。李紳の作品はいま一首も伝わらぬが、これに和して元稹が同じく新題樂府十五首を作つた(うち二首を佚す)。元和四年(八〇九年)詩人がこれに和するとともに、さらにそれを五十首に広めたのが、すなわち「新樂府」であり、とくに「新」の字をかむせたのは、上にのべた古い樂府と區別するため、新樂府とは、つまり今の唐代の新しい歌謡曲という意味である。

これら五十首の作品は、一首ごとに主題を異にし、その主題を各首の最初の句に示し、最後の一段に作詩の志を明言しているのは、詩經三百篇の体裁になつたものであり、また主題を説明する短い題序が各篇につけられていたり、五十首を總括する「序」が一番はじめにおかれているのも、全く詩經の体裁に従つたものである。

擢ばれて翰林に在り、身は諫官であつた詩人が、月づき諫紙を請うて上奏する外、かかる作品を歌詠したのは、「君よ君よ、此を聴け、壅蔽うものを開きて人の情に達らかならんと欲したまわば、先ず歌詞に向かつて諷刺を求められよ」(二一九ページ、采詩官)とうたうがごとく、貪吏奸臣たちによってふさがれ

た皇帝の聡明をきりひらいて、人民の窮状を知らしめ、それによって、「人の病みを救い済め、時の闕を裨け補わん」がためであった。

これは、たとい「之を言う者罪無く、之を聞く者以て戒むるに足る」（詩経序）とはいえ、實際は、時の政府にたてつく大胆不敵な行為といわねばならず、当時の世に容れられなかったことは言うまでもない。新樂府五十首を含めた「諷諭詩」が世に発表されるごとに、「權豪貴近の者は、相目て色を変え、政柄を執る者は扼腕し、軍要を握る者は切齒す」（文集卷二十八、元九に与うる書）というように、權力者にくしみをかうとともに、時には惡意の攻撃をもつてむかえられることもあった。元和十年（八一五年）詩人が中央から追放され、江州の一司馬に貶されたのも、直接の原因はほかにあったとしても、その根源はここにある。

そうした中であつて、詩人の文学に深い理解を示したのは、親友の元稹をはじめとするごく少数の人たちであつた。それらの人たちの理解によつておのが文学にたいする信念を失うまいと努めるのであつたが、その元稹すらがやがて困窮の境涯におとし入れられると、詩人はそれに書簡を送つて、「千、百年の後、安んぞ知らん、復た足下の如き者出でて、我が詩を知愛すること無からんことを」とのべ、おのが文学の正しい理解と評価を遠い将来に期待した。

四

以上説ききつた「諷諭詩」は、つまるところ詩人の政治的、社会的関心を詠じた詩であるが、彼の詩のすべてが、そういう作品で占められているわけではない。「諷諭詩」において、より多くの人たちの幸福

をねがった詩人は、自己の生活においても、同様に幸福であれかしとあこがれた。それは、公務からはなれた閑かな私的生活の中に、「足るを知り、和を保つ」（文集卷二十八、元九に与うる書）つつまじやかな快樂の生活であるが、それを主題として詠じた一類の詩を、彼は「閑適詩」とよび、「諷諭詩」について価値あるものと考えた。

この外、「感傷詩」と名づける一類の作品がある。これは、事物にふれて内にわきあがる感傷を、感傷のままにうたったものであって、悲哀の情をおびた作品が多い。倡妓にも暗誦され、当時の世にもてはやされたという千古の傑作「長恨歌」をはじめ「琵琶行」など、いずれもこの類の中に収められている。

以上「諷諭」、「閑適」、「感傷」の詩は、これを詠ずる態度こそちがえ、韻律や対句などに拘束されない古調詩であるてんでは一つであるが、なおこの外に、感興を美しい外形律にもりあげた多量の作品があつて、詩人はこれを「雜律詩」とよんだ。これは、さきなる「感傷詩」とともに、詩人みずからによつては高く評価されなかつたが、その中には、すてがたい、すぐれた作品のかずかずがあつて、それが、この詩人特有の平易な表現と相俟つて、広汎な愛好者を獲得した。

「閑適」以下の作品については、いずれこの書物の下冊で紹介するとして、次に、白居易の詩文集の伝本その他について、一言つけ加えておこう。

五

白居易の詩文集は「白氏文集」という。少しことわけて言えば、前後集からなり、前集が「白氏長慶集」で、後集が「白氏文集」、これをまとめて「白氏文集」とよぶが、わが国では、たんに「文集」とよべ

ば、白氏文集を意味したことさえあった。

前集である「白氏長慶集」は、詩人の依頼をうけた親友の元稹^{げんじん}が、その意を体して、穆宗皇帝^{ぼくそう}の長慶四年（八二四年）に編纂したもので、すべて五十巻からなる。編纂の体裁は、詩を、「諷諭」、「閑適」、「感傷」、「律詩」の四つに分類し、その順序にしたがって詩を排列したあとに、雑文を収める。早年の作である「新樂府」五十首は、むろん前集の中にある。

後集はすべて二十五巻、長慶集以後の作品を、詩人みずからの手で、数次にわたって編纂したもの。それが完結をつげたのは、武宗皇帝^{ぶそう}の会昌五年（八四五年）、詩人七十四歳の夏である。前集とは編纂の体裁を異にし、詩においては、さきなる四つの分類を捨て、格詩^{かくし}と律詩という二大分類法をとっている。格詩とは、樂府、雜體、歌行等をのぞく、詩形の整頓した五、七言の古調詩のことをいう。

以上前後集あわせて、彼の詩文集はすべて七十五巻であったのが、その後四巻を佚して、現存するものは七十一巻である。その伝本種種あるうち、わが元和四年（一六一年）、すなわち中国では明の神宗皇帝^{しんそう}の万曆四十六年に、那波道円^{なばどうえん}が朝鮮銅活字本によって覆刻したものは、通例「那波本」とよばれ、北宋板本の系統を引いて、原編の体裁を伝える。民国十八年（一九二九年）の四部叢刊本^{しぶそうかん}はこれを景印したものである。次に詩と文とをそれぞれ別に一まとめにして改編したものに、南宋紹興^{しやうこう}（一一三一—一一六二年）初年の板本があり、現に中国の北京圖書館が所蔵する（一九五五年、北京の文学古籍刊行社で景印された）。明の馬元調^{ばげんちやう}が万曆三十四年（一六〇六年）に刊行したいわゆる「馬本」は、これによったものであり、わが立野春節^{たてのしゆんせつ}が明曆三年（一六五七年）博士家である菅家^{かんけ}の旧訓といわれるものを附して刊行した「明曆刊本」は、さらにそれを覆刻したものである。この外、詩だけを収録したものに、清の康熙四十一

年（一七〇二年）、汪立名^{おうりつめい}が編訂した「白香山詩集」^{はくこうざん}四十卷があり、「汪本」とよばれる。

なお「新樂府」^{しんがふ}に関しては、日本に多くの古鈔本が伝わっており、中でも京都、神田喜一郎氏所蔵の古鈔本（古典保存会景印）が、最も古いおもかげを伝えて、はなはだ貴重である。中国にも、近く甘肅省敦煌^{くわんそう}の石室から発見された古鈔本があるが、「神田本」にくらべると、その価値ははるかに及ばない。

この小著は、上にのべた「那波本」（四部叢刊本）を底本とし、必要に応じて他の諸本と参校した。最後に白居易の詩を読むための参考文献をあげておこう。

白樂天詩解 鈴木虎雄著 大正十五年 東京弘文堂

統国訳漢文大成白樂天詩集四卷 佐久節訳註 昭和三十五年 東京国民文庫刊行会

白詩新釈 簡野道明著 昭和八年 東京明治書院

元白詩箋証稿 陳寅恪著 一九五五年 北京文学古籍刊行社

白居易研究 王拾遺著 一九五四年 上海文芸聯合出版社

白居易伝論 蘇仲翔著 一九五五年 上海文芸聯合出版社

Arthur Waley, "The life and times of Po Chi-i", 1949, New York, The Macmillan Company.

これらの書物のうち、佐久節氏の「統国訳漢文大成白樂天詩集」は、上述、「白香山詩集」におさめられた詩の全訳であり、鈴木虎雄博士の「白樂天詩解」は、「新樂府」および「秦中吟」の全訳、簡野道明氏の「白詩新釈」は、三百八十余首の詩の選訳である。王氏・蘇氏の両著は、いずれも伝記ならびに評論をのべたもの。詩人の伝記としては、最後にあげたアーサー・ウェレーの「白居易の生涯と時代」がもっとも詳密である。また陳寅恪氏の「元白詩箋証稿」は、「長恨歌」・「琵琶行」・「新樂府」等についての史的考証

としてすぐれる。

なお巻頭の写真は、上にのべた神田喜一郎氏所蔵の古鈔本（古典保存会景印）であり、肖像の方は、清人の「晩笑堂画伝」からとったものである。巻末の地図と市街図は、足立喜六氏著「長安史蹟の研究」（昭和八年東洋文庫）から借用した。